

ブレンド型eラーニング大学院教育の可能性 －新型コロナウイルス感染症防止に伴う遠隔授業の 事後調査分析から－³

The Possibility of Blended E-learning Education in Graduate Program: The analysis of follow up survey results on distant classes for prevention of the COVID-19 infection

進藤優子²・人見英里³・岩野雅子²

SHINDO Yuko², HITOMI Eri³, IWANO Masako²

要約

2020年度の新型コロナウイルス感染症対策の観点から、多くの大学で遠隔授業を取り入れることとなった。これに先立ち、山口県立大学大学院では新しい時代に向けたeラーニング大学の動きを見据えて、インストラクショナルデザインをふまえたブレンド型学習の導入を目指し、山口県立大学研究助成に申請を行った。全国的に開始されたポスト・コロナの大学あるいは大学院教育の検討とも一致することとなったが、コロナがあろうとなかろうと推進すべき方向性を模索している。一方で、すべての科目が一斉にオンラインになった2020年度前期の講義・演習・実習科目については、山口県立大学大学院国際文化学研究科修士課程および健康福祉学研究科博士前期・後期課程における実態について、大学院生および担当教員を対象にWEBによるアンケート調査を行った。その結果、新型コロナウイルス感染の心配があるという消極的な理由からだけでなく、特に留学生や社会人学生が多い本学大学院においては、時間的制約や場所的制約がない遠隔授業を希望している院生が92%と多いことが明らかになった。また、教員においても、概ね遠隔授業に満足しており、75%の教員が今後も遠隔授業を続けたいと回答していた。以上のことから、ポスト・コロナ時代に向けて、より充実した遠隔授業の展開とともに、学生中心の教育パラダイムの理論に基づいた新しい学びのスタイルを導入した大学院教育を試行していくことが重要であると考えられた。

Abstract:

Due to the impact of COVID-19 during 2020, most universities were forced as a matter of urgency to switch teaching delivery from face-to-face to online. However, already in autumn 2019-before the COVID-19 outbreak-the Postgraduate Schools of Yamaguchi Prefectural University had decided to introduce blended learning based on instructional design theories, with the objective of providing enhanced e-learning capacity within the existing teaching models for postgraduate education. This project applied funding from YPU's internal research funds. Thus, when all classes were moved to online delivery from April 2020 following the outbreak of COVID-19, there was already some structure in place for the delivery. To evaluate the effectiveness of graduate school teaching delivery in the post COVID-19 context, a web-based questionnaire was administered to students and teachers in the Master's program of the Graduate School of Intercultural Studies and the Master's and Doctoral programs of the Graduate School of Health and Welfare in Yamaguchi Prefectural University. The results of the survey showed that postgraduate students did not express significant concerns about any negative impact on their learning outcomes due to the switch to online delivery. Notably, 92% of adult or international student respondents actually expressed a preference for online delivery to be continued in the future because of the

1 本論文の有り得べき誤りなどは、すべて筆者に帰せられるものである。

2 山口県立大学大学院国際文化学研究科, Graduate School of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

3 山口県立大学大学院健康福祉学研究科, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

additional flexibility which this mode of delivery gives in terms of location and choice of time for such people to study. 75% of respondents from amongst faculty members also expressed satisfaction with the online delivery format and expressed their willingness to continue with online classes in the future post-COVID period. These survey results suggest that it will be important to focus on improving and developing the existing models of online delivery, even in the post-COVID era. Development of existing models for structured design of classes and online education management may become a priority, driven to a large extent by the expectations of students who have now become accustomed to online learning as the new normal. Such development may need to focus, especially at postgraduate school level, on a mode of blended learning which is based on a learner-centered education paradigm.

キーワード： オンライン教育、大学院教育、社会人教育、外国人留学生教育、ポストコロナ

Key words： Online education, Postgraduate education, Adult education, International student education, With/after COVID-19

1. はじめに

近年、全国どこからでも学べる環境が用意されるべきであるという考え⁴から、サテライトキャンパスや外国大学の日本校、さらにはインターネットの普及とともにMOOC（Massive Open Online Course）と呼ばれる大規模公開オンライン講座などさまざまな形態で大学は教育を提供してきた。今年度は新型コロナウイルス感染症対策の観点から遠隔授業を取り入れることとなった大学が急増し、山口県立大学でも全学で遠隔授業を実施した。

そこで、本研究では、2020年度前期に開始した遠隔講義のうち、山口県立大学大学院国際文化科学研究科修士課程および健康福祉学研究科博士前期・後期課程における実態を調査し、ポスト・コロナの大学院教育を見据えた手がかりを得るためにブレンド型eラーニング大学院教育の可能性を検討することを目的としている。本大学院は少人数であるものの、留学生や社会人など背景が異なる学生が多く在席しているため、対話型で、柔軟に授業が実施される必要がある。また、土日や夜間の開講を提供しているものの、通学が困難な社会人学生や遠方で通学が難しい学生なども多くなっている。このような流れを受け、遠隔講義の実態を把握することができれば、コロナウイルス対策という消極的な意味でなく、通学を前提としない効果的な大学院教育のあり方を検討することができると思われる。調査は、本学大学院に在籍する院生ならびに科目担当教員に対して行った。

2. 社会的背景と問題の所在

1999年に修士課程を開設した山口県立大学大学院は、2019年に20周年を迎えたばかりの若い大学院である。国際文化科学研究科一専攻（国際文化学専攻）、健康福祉学研究科二専攻（健康福祉学専攻・生活健康科学専攻）のうち、後者は2006年に博士前期・後期課程へと移行し、一専攻（健康福祉学専攻）へと改組している。実践的な専門性のため、留学生やグローバルに活躍する起業家や、医療系、福祉系の施設や組織等で働く社会人院生が多いのを特徴としてきた。昼夜開講制や長期履修制度を設け、コースワーク（科目）とリサーチワーク（研究指導）のうち前者を夜間や土日にも開講し、標準修了年限を超えて履修できるようにしている。近年、文部科学省により社会人の大学院での学び直しが提唱され、働きながらより学びやすい環境整備への関心が高まっている。そこで、2020年度山口県立大学研究創作活動助成への申請に向けて、2019年冬にブレンド型eラーニング（ブレンド型学習、ブレンディッドラーニング⁵）を射程に入れた大学院の教育改善に関する研究準備を開始した。その直後、新型コロナウイルスの影響を受けたのである。2020年度は5月より大学全体が全面的な遠隔授業による講義配信に移行する中、大学院でもすべての講義をオンラインによる同時配信とした⁶。教員と院生はそれぞれ職場や自宅など異なる場所にいるが、コースワークやリサーチワークは教室や演習室等での集合授業（対面授業）と同じような感覚でオンライン配信・受信ができ、ディスカッションや質疑応答なども同時双方向的に行う形となった。2021年度からはこのような緊急対応ではなく、アクティブラーニングの一つとしてのブレンド型学習のあり方をいくつかの科目で試行すべく準備を行っているところである。そのため、まずは新型コロナウイルス対策として実施した本年度のオンラインによる全面的な遠隔授業の影響について調査することとした。本稿では2020年度前期分（4月から8月初めの期末試験まで）の調査について述べている。

2020年1月16日に行われた日本での一人目の感染者発表後、1月24日という早い時期に東京大学がポータル上で学生向けのお知らせを掲示し、各大学も情報収集を行いつつ学生への周知を図り始めた。2月17日には国立大学協会がコロナ対応への会長メッセージを出し、4月には国立大学、公立大学ともに学生への経済的支援に関する緊急要望書を日本政府に提出している。この間、多くの大学では卒業式・修了式をはじめとする各種行事の中止や縮小、新年度の授業対策に向けた学生のICT環境調査等が行われている。文部科学省によると、2020年5月の調査では、回答のあった864の大学・高等専門学校のうち約9割にあたる778校が遠隔のみで授業を実施しているという状

4 文部科学省の第3期教育振興基本計画（2018-2022年）により、2030年度を目指した幼児教育から高等教育・生涯教育・社会教育等を含めた教育界全体の改革が進行している。

5 「オンライン学習と対面学習を組み合わせた教育方法。例えば、eラーニングで基礎知識を事前学習し、対面講義や集合研修で知的技能や運動技能の学習を行う。」北海道大学オープンエデュケーションセンター用語集より https://www.open-ed.hokudai.ac.jp/related_glossary/（最終アクセス2021年1月8日）

6 Zoom社による講義の同時配信システムと、YPUポータル上でのクラスプロフィールによる授業資料配信・課題提出等のLSM機能を使用した。

況にあった⁷。このような急激な状況変化により、前期終了時点で多くの大学がオンライン授業に対する学生や教員の声を聴く調査を実施し公開した。その目的は、前期当初のICT環境調査をふまえて学生や教員への支援をしつつ全面的なオンライン授業実施に踏み切った後、実際には個別にどのような影響が出ており、後期授業開始に向けてさらにどのような対策や支援を求めているのかを知るためであった。インターネット上で公開されている各大学の調査結果を見ると、学生はおおむねオンライン授業に対して対面授業よりも肯定的な反応をしている。この結果は、大学におけるキャンパスライフのあり方や教員による教室等での対面授業の価値に対する反省を促す要因となっている。同時に、with/afterコロナのニューノーマルな学びのスタイルに向けた新しい学習環境整備へのニーズがあることを示している。各大学の調査結果は様々な示唆を含んでいるが、ここでは文部科学省の国立大学・国立高等専門学校137校を対象とした調査結果⁸とともに、大学の枠を超えて学生の声を集めた全国大学生協同組合連合会の調査結果から、参考となる事項をまとめてみた。後者は4月実施分において約37,000人の学部生・院生から、5月実施分は約15,000人から、7月実施分は約9,000人（学部生のみ）から回答を得ている⁹。

文部科学省によると¹¹、学生はオンライン授業のほうがかえって発言しやすく、オンデマンド型授業は学生のペースで学習や復習ができて便利で、出席率やレポート提出率が向上しており、学びの準備的な部分はオンラインで、重要な部分は対面だという新たな教育形態のポイントが見えてきたとしている。一方で課題は、学生の通信環境やICT（情報通信技術）スキル、学生の学ぶ意欲への支援やメンタルヘルスケア等にあるとしている。

全国大学生協同組合連合会のアンケート調査結果を概観すると、以下の7つの課題にまとめられる。特に表記した場合を除き、大学院生を含む4月分の調査結果について述べている。

(1) 新入生への影響

4月の調査時点でこの設問の回答者（学部生）の約37%にあたる7,669人が一人も新しい友人ができていないと回答し、7月の時点でも約半数にあたる4,545人が大学でできた新しい友人は、5人未満あるいは友人ができていないと回答しており、その中で「できていない」と回答した者は全体の22%にものぼっている。大学院1年生の場合も、学部からの進学者以外で新たに大学院に入学してきた院生、来日できない外国人留学生、社会人院生等については、入学した大学院で出会うはずの新たな友人ができにくく、大学環境や施設設備・学生サービス・教職員等についてもわからないまま半年あるいは1年が経過してしまうことになる。4月の時点で、研究室出入り禁止が多数を占めており、研究仲間もいない状態である。

(2) 経済的影響

学部生への影響は大きく、回答者の約68%にあたる23,346人が2020年4月の段階で経済的な不安を感じていた。7月の調査（学部生対象）において、学部生では、国の学生支援緊急給付金、大学による給付型奨学金、都道府県による給付型奨学金など様々な経済的な支援制度があった中で、回答者の約6割にあたる5,380人が何も受給していなかった。それは決して経済的に困っていないからではなく、自由回答では経済的な不安や悩みが挙げられていた。院生についても、4月の調査において学部生よりも経済的な不安を訴える者が多く、アルバイト収入について「大きく減少する」、「減少する」と回答した院生は59%であった（学部生では50%）。院生については対面授業の停止による学内業務の取りやめ（ティーチングアシスタントやリサーチアシスタント等）、アルバイトの減少による影響が顕著であると思われる。

7 文部科学省「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について」2020年9月17日付け資料 https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf（最終アクセス2021年1月8日）

8 文部科学省「コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」令和2年9月24日付け資料 https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf（最終アクセス2021年1月8日）

9 全国大学生協同組合連合会「緊急！大学生・院生向けアンケート」4月実施版（2020年4月20日－30日実施）<https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/index.html>（最終アクセス2021年1月8日）

同「第2弾 緊急！大学生・院生向けアンケート」5月実施版（2020年5月20日－30日実施）<https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment/index.html>（最終アクセス2021年1月8日）

同「第3弾 大学生向けアンケート」7月実施版（2020年7月20日－30日実施）https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment_thr/index.html（最終アクセス2021年1月8日）

10 この内容については、本稿の共同研究者の発表資料をもとにしている。WILSON A. and IWANO. M. 'An Overview of Students' Questionnaires on the Effect of Covid-19 on Japanese Universities' 2020年12月11日にオンライン国際会議で発表。All-Russian conference with international participation. "Psychological problems of the individual and society in the context of an epidemiological threat" Russia: Moscow. Kosygin Russian State University

11 注8に同じ 資料p.8より引用

(3) ICT環境の未整備とオンライン授業の質

短期間の周知で自宅や下宿においてオンライン授業を受けるためのパーソナルコンピューターやプリンター、Wi-Fi環境を整備する必要があったが、大学からの支援が不足していたことがわかる。また、回答では約22%の6,010人がオンライン授業で出された課題やレポートについて全くフィードバックがないと回答し、5月時点で大学院生でも約13%が全くと、約44%があまりないと回答し、質の高い授業と低い授業との差を感じていることもわかる。社会人大学院生の場合はICT環境の整備にはそれほど問題がないと思われるが、教育の質に関しては課題もあると思われる。

(4) 自己管理や時間管理の難しさ

一日中コンピューターの画面の前に座ったままで多くの科目を受講する学部生については、長時間画面を見続けた上に、外出自粛（ステイホーム）のため、余暇の時間はテレビやスマホ、ゲームや動画サイトなどの画面をさらに見続けていたことがわかる。時間感覚が乏しくなり、やる気がでないなどの症状にもつながっている。本学に多い社会人大学院生の場合はワークとスタディのバランスは日ごろから取れていると思われるが、それでもコロナによる日常生活や仕事環境の変化による負荷があったと思われる。また、大学院生では修了要件の中のコースワークの割合が低く、学部生に比べて履修科目数が少ないため、通学をするというルーティーンが崩れて時間管理が難しいケースもあることが想定される。

(5) 就職活動の困難さ

回答者の多くが就職に関する不安を感じており、希望する業界や業種がコロナの影響によりどのようになるのかを案じ、実際の就活では情報収集の困難さがあるとしている。大学院生（修士課程）の場合は、入学後1年次の後半から実質的な就活が始まるため準備期間は短い。大学院修了の学位の価値が広く認識されていない人文系の場合、理系に比べて就職活動にはさらなる困難さがある。コロナの影響によりオンライン就活やオンラインキャリアサポート等、「いつでも、どこでも、だれでも」は学びのスタイルのみならず、就活のあり方や働き方にも大きな影響と変化を生じている。

(6) 身体的・精神的影響

回答者の多くが学生が身体的な問題（特に目の疲れ）や食生活の乱れや野菜不足を訴えていた。約22%が体重増加、約15%が食費の減少に関する問題を上げていた。約33%が学ぶ目的の喪失感を訴えており、肩こり、倦怠感、肌荒れ、冷え、めまいなどの症状が出ているとしていた。また、多くの学生が大学に対する何らかの不満を感じており、それは特に授業の質に対するものであった。院生の場合も同様で、学部比べて少人数で一人一人に目が行くが、画面上ではわかりにくい身体的・精神的問題をいかに汲み取りサポートするかが課題であると思われる。特に来日できない留学生への対応や、新たな大学院環境のもとで友人のできていない院生などの場合、孤立感は大いと思われる。

(7) オンライン授業の適切性

全国大学生協同組合連合会の7月の調査（学部生対象）によれば、オンライン授業の中で、オンデマンド型の授業（動画教材、テキスト教材）が約65%であり、同時双方向型の授業は34%のみであった。また、オンライン授業では、課題が出されているが、課題についての教員からのフィードバックは「すべての授業である」と「多くの授業である」を合計しても36%、「あまりない」と「全くない」を合計して63%であり、学生からは不満があげられている。5月の調査では大学院の授業はオンデマンド型が54%、同時双方向型が44%と学部生と比べると後者の方が多い。後述する本大学院での調査結果では、本学では双方向型の授業を実施していることもあってか、コロナ禍が過ぎても多くの院生はオンライン授業の継続を望んでおり、その理由は発言のしやすさ、教員の声の聞き取りやすさ、画面上での資料のみやすさ、通学の時間の節約等であった。一方で、オンライン授業で出される課題に対するフィードバックを欲しており、質の向上を求める意見が多いことから、この2点への対応を考える必要があると思われる。大学院では少人数のために学部と比べるとフィードバックの機会が多いが、授業デザインとして計画されたしゅみの整備やFD等も必要であると思われる。

以上の先行事例をふまえ、本学での調査を実施し、新たな学習環境と授業形態について検討するための一助とした。

3. 調査方法

Googleアンケートを用いて個人が特定されない無記名のウェブ形式質問紙調査を大学院に在籍する全院生43名（国際文化学研究科10名、健康福祉学研究科博士前期課程19名、同博士後期課程14名）および科目を担当している教員36名（国際文化学研究科16名、健康福祉学研究科20名）を対象として、メールでアンケートのURLを周知し、メールおよびアンケートの冒頭で2020年7月28日から8月11日までの約2週間の間に、自由意志によって、質問紙に回答・送信してもらうことを依頼した。調査内容は大学院生用および教員用に個人の特定につながらないそれぞれ15および13の質問項目を設定し質問した。匿名で、研究科、通学時間などの基本属性、遠隔講義の経験の有無、利用ツールなどを選択肢から選択させ、遠隔講義、演習、研究会および研究発表会などの評価について「とても満足」、「やや満足」、「やや不満」、「とても不満」および「該当なし」の5選択肢から1つ選択させ、その理由や改善点等を記述式の回答で求めた。単回答および複数回答については単純集計し、記述式回答については内容をカテゴリー化し集計した。

4. 調査結果

4-1 大学院生

43人中36名から回答を得た。国際文化学研究科が8名、健康福祉学研究科は28名であった。年齢は20代が最も多い10名ではあるものの、30代が9名、40代および50代がそれぞれ8名ずつ、60代以上が1名と本学の特徴である社会人学生が多い。また、片道通学時間は30分以内が18人と最も多く、1時間以内が8名、1時間半以内が5名、2時間以内が2名、その他が3名であった。このことから大学院生の多くは山口県内に在住しており、県外から通学する者は限られていることが見て取れる。その他を選択した学生は新型コロナウイルス感染症の影響で日本に入国できず海外に留まらざるを得ない留学生と思われる。

次に、遠隔授業の受講場所について、複数回答での結果は、自宅が24名と最も多く、次いで大学院が9名、職場が4名、その他が3名であった。本学では、Wi-Fi環境が整っていない学生・院生のために一部教室や大学院の院生室の利用を認めていたため、大学周辺に住んでいる者は大学で受講したと思われるが、多くは自宅で受講していたことがわかる。

第3に、遠隔授業の経験については、近年増加しているとはいえ、過去に受講したことがある者は5名のみという結果であった。アプリケーションについては、本学で指定しているZoomに加えて、以前からの学内授業支援システムである「YPUポータル」および本学でカスタマイズしたMoodle「WEBかるちゃー」が用いられており、その他は1名のみだった。なお、「WEBかるちゃー」は教員有志が自主的に管理・運営しているシステムとなっており、現時点では全学展開はなされていない。

第4に、講義および演習の実施状況について、出席のしやすさ、教材の受け取りやすさ、教材の見やすさ、説明の聞きやすさ、ディスカッションのしやすさ、レポートなどの提出のしやすさ、プレゼンテーションのしやすさ、小テスト・試験の受けやすさ、学習量、充実度、教員とのやり取り、受講生同士のやり取りおよび成績評価の13の項目に細分化した満足度を示す。まず、出席のしやすさについては、「とても満足」が23名、「やや満足」が9名、「やや不満」が1名と満足度は高い結果となった。「とても満足」および「やや満足」と回答した理由として、出席がしやすいと挙げている者が多く、6名が通学（移動）時間が必要ないからと、3名がスケジュール管理がしやすいと回答している。また、時間配分が簡単、安心して授業を受けることができたことにメリットを感じていることも明らかになった。逆に、スケジュールが管理しにくいと感じている者もいた。また、オンライン上の教室に入るのに必要なパスワードを忘れたり、参加の仕方がわからなかったりして困ったとの回答もあった。

次に、テキストや講義資料などの教材の受け取りやすさについては、「とても満足」が18名、「やや満足」が7名、「やや不満」が6名、「とても不満」が1名と出席のしやすさに比べ満足度が低下していた。資料の管理がしやすかったり、自主学習をする際などに活用しやすかったりという意見が挙げられた一方、2名が資料のアップロードされている場所がどこにあるかわかりにくいと回答していたり、資料の印刷のためインク代がかかると回答していたりするなど、事前にダウンロードをしたり、印刷をしたりすることを面倒に感じているように思われる。

教材の見やすさについては、「とても満足」が18名、「やや満足」が9名、「やや不満」が5名と、教材の受け取りやすさに比べると満足度は高いことが見て取れる。「とても満足」および「やや満足」と回答した理由として10

名もの学生が見やすいことを挙げていたことから、教室でスクリーンや板書などを見るより効果が高いと思われる。一方で対面では多くの資料を同時に見ることができるため、Zoomでの資料共有（一度に一資料のみの提示しかできない）をもどかしいと感じている者もいた。

第4に、説明の聞きやすさについては、「とても満足」が15名、「やや満足」が13名、「やや不満」が5名であった。イヤホンなどコンピューター周辺機器の環境が整っていれば問題はないようではあるが、ネット環境によっては音声や画像が乱れることもあり、対面の方がより聞きやすいと判断したように推測される。

第5に、ディスカッションのしやすさについては、「とても満足」が14名、「やや満足」が12名、「やや不満」が4名、「とても不満」が3名であった。不満である理由として、電波が悪く聞こえなかったり、人数が多い場合には画面上で他の参加者の表情などを確認しづらく難しかったりと感じているようで、特に対面での面識がない新入生にとってはやりにくかったと推測される。

第6に、レポートなどの提出のしやすさについては、「とても満足」と「やや満足」と回答した者がそれぞれ16名および13名と多く、「やや不満」と回答した者は1名に過ぎなかった。対面式の授業であれば通常印刷したものを提出するように指示されるが、理由にも挙げられていたとおり、WEBでの提出では印刷等の手間が省けるため満足度は高かったと思われる。

一方プレゼンテーションについては、「とても満足」が16名、「やや満足」が10名で、「やや不満」が7名と多い。理由として指摘されているとおり、プレゼン時の資料の提示のみでなく予め資料を印刷できるように設定するなり配慮しないと、ついていけない者がいることが明らかになった。

第8に、小テストおよび試験については、「該当なし」を選択した者が最も多いものの、「とても満足」が11名、「やや満足」が5名と満足度はおおむね高く、「やや不満」は2名しかいなかった。これらは対面形式の授業評価と比較してもそれほど変わらない結果であろうと思われる。

第9に、学習量については、「とても満足」が16名、「やや満足」が12名、「やや不満」が1名、「とても不満」はいなかった。学習については、遠隔授業であっても問題なくできていることがうかがえた。

第10に、授業内容の充実度については、「とても満足」が18名、「やや満足」が11名、「やや不満」が2名、「とても不満」はいなかった。94%の院生が満足していることから、大学院の授業では少人数で行っていることもあり、遠隔であっても対面と同等に院生にとって満足のいく授業が展開できていることがうかがえた。

第11に、教員とのやり取りについては、「とても満足」が18名、「やや満足」が11名、「やや不満」が3名、「とても不満」が1名であった。質問しやすいと回答している学生が2名いたものの、逆に対面に比べて不慣れということもあり5名が質問しにくかったと回答していた。また、細かな点まで質問しにくかったと答える者もいた。

さらに、受講生同士のやり取りについては、「とても満足」が12名と他の設問に比べて減少し、「やや不満」が7名と増加している。互いにわからないことを尋ねて相互学習することや、雑談など受講生同士のやりとりはほとんどなかったため、場の共有ができないというデメリットや孤独を感じることがあったと回答している学生もいた。

最後に、成績評価については、こちらも対面式授業との比較が難しいものの、「やや不満」と回答した者は1名に過ぎなかった。これらの結果は表1にまとめてある。

表1 講義および演習の実施状況（単位：人、n=36）

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満	該当なし
1.出席のしやすさ	23	9	1	0	3
2.教材の受け取りやすさ	18	7	6	1	4
3.教材の見やすさ	18	9	5	0	4
4.説明の聞きやすさ	15	13	5	0	3
5.ディスカッションのしやすさ	14	12	4	3	3
6.レポートなどの提出のしやすさ	16	13	1	0	6
7.プレゼンテーションのしやすさ	16	10	7	0	3
8.小テスト・試験の受けやすさ	11	5	2	0	18
9.学習量	16	12	1	0	7
10.授業内容の充実度	18	11	2	0	5
11.教員とのやり取り	18	11	3	1	3
12.受講生同士のやり取り	12	11	7	1	5
13.成績評価	12	8	1	0	15

さらに、学内で開催された研究発表会や研究会の実施状況についても8項目に分けて満足度を尋ねたところ、先の結果と概ね同様な傾向がみられた。これらの結果は表2にまとめてある。発表資料の受け取りやすさを満足度が高い理由として挙げている者もいる一方で、資料の提示がなされるのみで紙媒体の資料としては受け取ることができなかつたり、資料が手元にないため内容の確認ができず理解が困難だつたりを満足度が低い理由と挙げている者もいた。発表資料の準備については、満足理由として対面形式と変わらないことや、印刷資料の準備が不要なことを挙げていた。また、途中でスマホや本で調べやすいことや、緊張せずリラックスできたことも挙げられていた。一方、不満理由としては、聞き手の反応が確認しづらくコミュニケーションが難しいことが挙げられていた。

表2 研究発表会や研究会の実施状況（単位：人、n=36）

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満	該当なし
1.発表資料の準備のしやすさ	16	12	1	0	7
2.発表資料の受け取りやすさ	13	11	6	0	6
3.発表資料の提示のしやすさ	16	13	2	0	5
4.発表資料の見やすさ	19	12	5	0	0
5.説明のしやすさ	15	11	6	0	4
6.発表者の説明の聞き取りやすさ	10	18	7	1	0
7.発表内容の充実度	16	14	4	0	2
8.質疑応答のしやすさ	14	11	8	2	1

さらに、学習動機や学習効果、研究の進め方など学習全般で良い点や逆に改善すべき点を自由記述で尋ねたところ、良い点として、4名が時間を確保しやすいことを挙げていた。また、スケジュールリングを意識して行動することができるようになったことや、紙面で伝える工夫が必要になるため思考を整理することができたことを挙げている者もいた。一方、改善すべき点として、遠隔授業では周囲の教員や院生との相談ができず個人学習になってしまいがちなため、遠隔と対面の併用での講義を望んでいる者や、自分のペースで研究を進めることしかできないとあきらめている者もいた。

科目間での授業にばらつきがあると感じられたかどうかについては、ばらつきがあると回答した者は2名で、無いと回答した者は17名、それ以外の者は複数科目を受講していなかった。改善点として、一部対面で行なわれていた授業もあり、遠隔か対面かのどちらかに統一を求めている者もいた。また、パソコンの操作が不慣れな教員がいたこと、資料の提出方法が教員によって異なることなどが挙げられていた。

パソコンやインターネットなどの環境や知識などで問題があったかどうかについては、8名が問題ありと回答しており、無いと回答した者は28名であった。問題としては通信環境の悪さが挙げられていた。またオンライン上での教室の再入室に時間がかかったり、音声が届けなかったりして講義が聞けなかった場合の対策を求めている。さらに、環境の悪い他の受講生がいた場合には、その発言が聞こえないことや、スマートフォンを使用して受講する場合には資料を共有することができないこと、教員からの連絡用のメールが多すぎることも挙げられていた。本学には正式なLMSが無いので、ファイルサイズの大きい資料は必要に応じて、教員がメールで受講生宛に個別に送っていたことも一因と考えられる。

肩こり、腰痛、目の疲れ、体調不良、集中力がない、注意散漫など体調に変化があったか尋ねたところ、変化のなかったものが9名、変化があったものは27名もいた。特に連続の授業の場合の目の疲れだけではなく視力の低下を指摘する者や、肩こりや疲労感を感じていたものもいた。さらに、長時間にわたる研究発表会などの場合は画面

から離れる時間を確保したり、休憩をより多くしてほしいとの要望もあった。また、不慣れや通信環境が悪いことからくるストレスを感じる者もいた。慣れによって体調不良が緩和されることも考えられるが、対面と同様な時間配分で授業等を行うことが疲労の原因と考えられるため、オンライン授業では時間配分をはじめ疲労を軽減する工夫をすることが必須であると考えられる。

今後も遠隔授業を続けたいかについて尋ねたところ、33名が「はい」、3名が「いいえ」と回答しており、遠隔授業はほとんど(91.7%)の院生に支持されていた。遠隔授業を続けたい理由(複数回答)については、「通学時間を削減できるため」が最も多い24名であった。次に多いのは「新型コロナウイルス感染の心配があるから」が22名、「対面形式と併用することで学ぶ環境や方法が柔軟になる」が17名、「講義や演習に集中できるため」が7名だった。さらに、新型コロナ感染防止以外にも、雪や大雨など気象条件によって取り入れると良いと思っている者や、社会人が多い現状から遠隔授業にせざるを得ないと思っている者、勤務先の自粛感があると回答している者がいた。健康福祉学研究科の院生には医療機関や福祉施設に勤務している者も多く、多くの人の集まる場所(多くの大学生が集まる大学もその中に含まれる)に行かない等の行動制限がある場合もあり、院生の立場に配慮した授業開講形態を考えることも重要であると考えられる。また、続けたくない理由としては、オンラインでは質問がしにくい、機器やソフトの扱いが不慣れという意見が挙げられており、オンラインであっても自由に質問ができるような雰囲気づくりや、学部生に比べて年齢の高い社会人院生に対しては機器や授業ツール等の使用にあたってのより丁寧な指導も必要となることが考えられた。

最後に、他の大学院などで実施していることなどで参考になることを尋ねたところ、DingTalkという無料アプリを挙げていたり、コロナ禍前から遠距離の学生のために遠隔授業を受けることができる大学があることを挙げていたりした。

4-2 教員

教員に対しては、対面形式と比較した実施状況について回答を求め、国際文化学研究科は16人中12名から、健康福祉学研究科は20人中17名から計29名の回答を得た。年齢は40代が9名、50代が13名、60代が7名であった。

次に、遠隔授業の経験については、過去に実施したことがある者は8名と大学院生より多い結果であった。以前から本学から交換留学生として海外の協定大学に派遣される学生に対しては演習を遠隔講義で提供していたこともあり、慣れている教員もいることが推測される。

遠隔講義で使用するアプリケーションについては、本学で指定しているZoomの他に、学内授業支援システムである「YPUポータル」および本学でカスタマイズしたMoodle「WEBかるチャー」が使用されており、その他にはGoogle ClassroomとMicrosoft Teams が用いられていた。

第4に、講義および演習の実施状況については、出席状況、教材の準備のしやすさ、教材の提示のしやすさ、説明のしやすさ、ディスカッションのしやすさ、レポートなどの提出のしやすさ、プレゼンテーションのしやすさ、小テスト・試験のしやすさ、受講生の学習量、授業内容の充実度、受講生とのやり取り、受講生同士のやり取り、および共に担当する教員とのやりとりの13項目に細分化した満足度について尋ねた。これらの結果は表3にまとめられている。

まず、出席状況については、「とても満足」が18名、「やや満足」が5名、「とても不満」が1名と大学院生の結果と同様に高い満足度となった。「とても満足」および「やや満足」と回答した理由として、社会人学生が時間的に余裕を持って出席できたり、夜間にしかできなかった演習が臨機応変にできたり、遠方から通学する必要があるため仕事の隙間時間などでも演習ができたり、大学院生の仕事の都合などで個別に実施していた演習を他の院生も交えた合同演習が容易になったりなど、受講生の状況やニーズに対応しやすいばかりではなく、教員のスケジュール管理も容易になっていることが明らかとなった。一方で、ネット環境の不具合などで出席がギリギリとなる受講生の対応に常に追われたり、前の授業が対面形式の受講生がいたため毎回遅刻して困ったり、あるいは学生のニーズに合わせやむを得ず対面形式と併用したが難しかったりなどと回答している者がいた。

次に、教材の準備のしやすさについては、「とても満足」が8名、「やや満足」が11名、「やや不満」が4名、「とても不満」が1名と大学院生の教材の受け取りやすさの結果と同様に満足度がやや低下している。授業の準備は大変だったがこれまでの授業を見直し改善する機会となったというポジティブな回答も挙げられていた。

第3に、教材の提示のしやすさについては、「とても満足」が8名、「やや満足」が11名、「やや不満」が4名、「とても不満」が1名と、教材の準備と同じ結果であった。メリットとしては、Zoomの機能を利用して即座に資料が提供できる、資料を共有することで細かいところまで見ることができたり論点を明確にすることができたりする、Zoomのホワイトボード機能を利用して共有するだけでなく、記録として残すことができるなどの回答があった。一方で、デメリットとしては複数の資料を同時に見られないこと、YPUポータルでは提示できる資料の容量上限が低いことや学生同士で資料の共有できないため、資料を電子メールで個別に送るなどの対応が必要だったことが挙げられていた。さらに、動画の配信がし難かった、著作権により配信やアップロードできない資料があったなども指摘されていた。また、共有を選択し忘れて学生からの指摘で気づくことが度々あったという操作上の問題も挙げられていた。

第4に、説明のしやすさについては、「とても満足」が6名、「やや満足」が12名、「やや不満」が4名、「とても不満」が2名であった。第5に、ディスカッションのしやすさについては、「とても満足」が5名、「やや満足」が11名、「やや不満」が5名、「とても不満」が2名であった。Zoomの機能を利用して任意のグループ割ができることや、受講生のそれぞれの専門性で互いにアドバイスしあう良い機会となったことが挙げられていた。一方で、細かな議論やデリケートな議論は困難であったり、多数の参加者の把握のために画面をスクロールする必要がある等の不満な声もあった。

第6に、レポートなどの提示のしやすさについては、「とても満足」が6名、「やや満足」が8名、「やや不満」が5名、「とても不満」が2名であった。満足の理由として、課題管理が容易であることを2名が挙げていた。一方で、レポートの確認が難しかったとの回答もあった。一方プレゼンテーションのしやすさについては、「とても満足」が9名、「やや満足」が11名で、「やや不満」が3名、「とても不満」が1名と満足している者が多く見られた。

第8に、小テストおよび試験については、「該当なし」を選択した者が最も多いものの、「やや満足」が2名、「やや不満」は3名、「とても不満」は3名と不満の方が多く結果であった。対面と比べて、採点が難しいとの指摘があった。

第9に、学習量については、「とても満足」が5名、「やや満足」が13名で、「やや不満」が2名、「とても不満」が2名と、第10に、授業内容の充実度についても同じく、「とても満足」が4名、「やや満足」が15名で、「やや不満」が3名、「とても不満」が2名と満足度の方が高い結果となった。相手がまじめに聞いていると想定して授業をしているが、本当に相互理解できているか定かではないとの批判的な意見もあった。理解度については、別途課題や試験などを課して確かめるしかないと思われる。

第11に、受講生とのやり取りについては、「とても満足」が3名、「やや満足」が12名、「やや不満」が7名、「とても不満」が2名と不満の回答が他の設問に比べ多く見られた。満足の理由としては、音声がよく聞き取れたことや、少人数なので通常と変わらず顔を見ながら応答することができたことが挙げられていた。一方で、不満の理由としてパソコンの小さな画面で受講者全員の様子を把握することは難しいこと、および授業中に個別で話ができないことが挙げられていた。さらに、コミュニケーションは相手の顔だけを見てするのではなく身体全体の表情を見、生の声を直接聞くものであるため、大学院生に対してまともな教育ができていないことになるという意見もあった。

さらに、受講生同士のやり取りについては、「とても満足」が1名と他の設問に比べて減少し、「やや満足」が10名、「やや不満」が7名、「とても不満」が2名、「該当なし」9名と、不満との回答が多く見られた。「該当なし」の回答が多いが、これは本大学院の規模が小さいために受講生が1名しかいないケースも多くあるためと思われる。受講生同士の共同作業が難しかった、言語のかべが対面より超えにくかった、学部生では問題はなかったが大学院生ではやりとりが少なかったといった指摘があった。科目履修をするのは1年次生が中心となることから、これまでお互いの面識のなかった新入生の履修が多いことも影響しているように推測される。一方で、共に担当する教員同士とのやり取りについては、「やや不満」と回答した者が1名だけだった。教員同士はもともと面識がある上に、業務は大学内で行っているためにオンライン以外でのやりとりが可能であったことが不満の少ない要因であると推察される。

表3 講義および演習の実施状況（単位：人、n=29）

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満	該当なし
1.受講生の出席状況	18	5	0	1	5
2.教材の準備のしやすさ	8	11	4	1	5
3.教材の提示のしやすさ	8	11	4	1	5
4.説明のしやすさ	6	12	4	2	5
5.ディスカッションのしやすさ	5	11	5	2	6
6.レポート等の提示のしやすさ	6	8	5	2	8
7.プレゼンテーションのしやすさ	9	11	3	1	5
8.小テスト・試験のしやすさ	0	2	3	3	21
9.受講生の学習量	5	13	2	2	7
10.授業内容の充実度	4	15	3	2	5
11.受講生とのやり取り	3	12	7	2	5
12.受講生同士のやり取り	1	10	7	2	9
13.共に担当する教員とのやり取り	2	9	1	0	17

さらに、学内で開催された研究発表会や研究会の実施状況について、5項目に分類して満足度を測った結果は表4のとおりである。海外など遠方にいる参加者も他の参加者と同様に発表ができ聴講できることや、発表者と発表を聞く側が同じ場所にいらなくて良いのが便利であるとの意見があった。また、資料が見やすく、通常より学生がより身近に感じられ、集中しやすくし、頭に入りやすいとの意見が2名から挙がっていた一方で、パソコンの画面では見えにくい資料があったり、手元の資料配布が無いために、発表時にスライドを目で追うことが中心になり研究内容を十分に理解した上で適切な助言をすることが難しかったり、画面共有では自由に他のページを見ることができなかったとの意見も挙がった。これは、これまで（対面時）は発表スライドを印刷資料として参加者全員に配布していたが、オンライン発表会では、未発表のデータが中心となることから当日のスライド提示のみで発表会を行ったために戸惑いがあったものと考えられる。また、聞き取りにくい音声があったことや、オンラインでは会場開催に比べて質疑応答を躊躇する傾向があったことから、もっと積極的に質疑をすべきであったとの声もあった。対面では挙手をして発言することに慣れているためか、オンラインの場合はパソコンの操作等に不慣れであると積極的な発言が難しいと推測される。

表4 研究発表会や研究会の実施状況（単位：人、n=29）

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満	該当なし
1.発表資料の受け取りやすさ	3	15	5	2	4
2.発表資料の見やすさ	10	10	7	1	1
3.発表資料の提示のしやすさ	8	9	9	2	1
4.発表者の説明の聞き取りやすさ	8	12	6	1	2
5.質疑応答のしやすさ	6	14	6	2	1

さらに、対面形式と比較して、オンライン形式の場合に学習動機や学習効果、研究の進め方など学習全般で良い点や逆に改善すべき点について、自由記述方式で尋ねた。大学院生の回答と比較すると不満に感じている教員の割合が多いものの、良い点として、対面形式と若干の違いがあるだけで授業自体に影響はない、対面が理想だが不満というほどでもない、教務や図書館などからの情報をすぐに院生に伝えられる、大学の施設が有効利用できる、履修中のアクセス数（受講者数）がわかるのがよいといった、ポジティブな回答も多くみられた。また、遠隔授業では説明しにくい文献検索やプレゼン作成の指導動画などがあるといった提案もあった。

複数の授業を担当している場合、科目間での授業にばらつきがあると感じられたかどうかについて尋ねたところ、ばらつきがあると回答した者は3名で、いいえの回答は7名であった。それ以外の者は複数科目を担当していなかった。この回答から、たとえ同じ教員が授業をしたとしても、一部の授業では受講生の態度によって授業の展開が変化することが推察された。

パソコンやインターネットなどの環境や知識などで問題がないかについても尋ねた。これについては、9名が問題ありと回答しており、問題無しは20名であった。遠隔授業の実施場所については原則研究室と定められており、Wi-Fi環境は整っているが、問題として、Zoomの使い方がわかっていなかったり、機能を熟知していなかったりを挙げていた。上手な使い方や工夫についてのFDをしてほしいとの意見もあった。オンライン授業の開始にあたり、全教員に向けて複数回FDが開催されていたが、基本的な使用方法を周知する内容であったため、詳細な機能の使い方までは周知できておらず、今後は様々なレベルのFDの開催が必要と考えられる。今回の調査で挙げられた不満の内容を見ると、操作方法や一部周辺機器の充実によって解決できる内容が多く挙げられていた。このような不満は研修の充実によって解決が可能であると考えられる。また、時間帯によっては頻繁にインターネットの接続が切断されるため、受講生の通信環境の改善が多く指摘されていた。さらに、「YPUポータル」はアップできる資料等の容量が小さいので細分割作業が必要だったことも挙げられていた。「YPUポータル」は大学向け教務事務システムに授業支援機能を付加したものであり、学習管理運営ツール（LMS）ではないことから、eラーニングを本格導入する場合には遠隔講義システムだけでなく、LMSを完備しておく必要があることが明らかとなった。

対面形式と比較して、肩こり、腰痛、目の疲れ、体調不良、集中力がない、注意散漫など体調に変化があったか尋ねたところ、変化があったものは16名で、変化の無い者は13名であり、学生より体調に悪い変化があったという結果であった。4名が目の疲れがあり、特に目が悪い人には長時間の画面注視は辛かったり、一日中授業の担当日は辛かったりとの意見があった。また、首の疲れおよび肩こりが1名ずつ、腰痛が2名いた。特に危険な症状として、細かい準備が多いことからくるストレスと睡眠不足に陥ったことや、心身ともに疲労が激しく精神的に鬱状態になったことが挙げられており、遠隔授業を可能な限り避けるべきであるとの意見もあった。さらに、学内の運動施設の充実を願っている者もいた。

今後も遠隔授業を続けたいかどうかについて尋ねたところ、22名が「はい」と、7名が「いいえ」と回答していた。続けたい理由については、「新型コロナウイルス感染の心配があるから」と「対面形式と併用することで、学ぶ環境や方法が柔軟になるため」がそれぞれ17名と最も多く、「通学時間を削減できるため」も7名と多かった。「講義や演習に集中できるため」は4名で、海外の大学院生とも支障なくディスカッションできたからや、遠隔ならではのメリットがかなり多くあるからというポジティブな意見のほか、続けたいという希望ではなく、遠隔でしかできないからという消極的な意見もあった。一方で、続けたくない理由として、授業準備が大変だから、教員および受講生からの発言によらない情報量が少なく感じるから、教育効果が低いと思われるから、対面の方が自分の授業スタイルに合っているから、さらには大学院生、教員双方にとって、遠隔方式はメリットが感じられないという否定的な意見も聞かれた。

最後に、他の大学院などで実施していることなどで参考になることを尋ねたところ、来学の必要がないため遠方の非常勤講師による講義が可能となることが挙げられていたが、完全オンライン化では学生の満足度が得られるか不明であるとの懸念も同時にされていた。また、動画サイトをそのまま提示したり、試験を自動採点したりするなどの機能をもったLMSの充実が提案されていた。

5. おわりに

今回のアンケート結果から、新型コロナウイルス感染症が収束したとしても、留学生や社会人学生が多い本学大

学院においては、時間的制約や場所的制約がない遠隔授業を継続していくことを前向きに検討していくべきと考えられる。今後は、対面および遠隔授業のそれぞれのメリット・デメリットを踏まえた上で、インターネット環境の整備、遠隔講義システムやアプリケーションの操作方法だけでなく遠隔授業の効果的な展開方法など教育の質を向上させるための研修、eラーニングには必須のLMSの全学的な導入、遠隔講義の導入に伴う目の健康などを重視した新たな健康管理などを充実させていく必要がある。

また、今年度は新型コロナウイルス感染が急速に拡大したために、教員及び入学生に対して遠隔授業のための環境整備などを呼び掛ける間がなく、新年度の開始後に急遽、遠隔講義を導入することになったため、環境整備が授業開始に間に合っていないという問題が生じていた。今後は、このような授業形態が一般化する前提で準備をすることが可能であるため、今回の調査で指摘されていた技術的な問題点は、かなりの部分で解決をすることができると考えられる。

一方で、日本のみならず世界中の大学でも遠隔授業を強化していく傾向がある中で、どのように差別化を行っていくのかも検討していく必要がある。本大学院は、地域人材の育成のために、小規模大学のメリットを最大限に生かし、教員と院生の距離が近く丁寧な指導ができることをその特徴としてきた大学院である。今後は、その良さを維持しながらも、遠隔講義という新たなツールで世界を広げていくことが必要となる。そのためには、教員と院生が立場を超えて協働し、新たな教育の方向性を見出していくことが必要となると考えられる。

参考文献・URL

- 全国大学生生活協同組合連合会 「緊急！ 大学生・院生向けアンケート」4月実施版（2020年4月20日-30日実施）
<https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/index.html>（最終アクセス2021年1月8日）
- 全国大学生生活協同組合連合会「第2弾 緊急！ 大学生・院生向けアンケート」5月実施版（2020年5月20日-30日実施）
<https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment/index.html>（最終アクセス2021年1月8日）
- 全国大学生生活協同組合連合会「第3弾 大学生向けアンケート」7月実施版（2020年7月20日-30日実施）
https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment_thr/index.html（最終アクセス2021年1月8日）
- 北海道大学オープンエデュケーションセンター用語集 https://www.open-ed.hokudai.ac.jp/related_glossary/（最終アクセス2021年1月8日）
- 文部科学省「第3期教育振興基本計画（2018～2022年）」平成30年6月15日閣議決定
https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf（最終アクセス2021年1月11日）
- 文部科学省「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について」2020年9月17日付け資料
https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf（最終アクセス2021年1月8日）
- 文部科学省「コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」令和2年9月24日付け資料 https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf（最終アクセス2021年1月8日）
- WILSON A. and IWANO. M. 'An Overview of Students' Questionnaires on the Effect of Covid-19 on Japanese Universities' 2020年12月11日
- All-Russian conference with international participation. "Psychological problems of the individual and society in the context of an epidemiological threat" Russia: Moscow. Kosygin Russian State University（オンライン国際会議）

謝辞

本調査にご協力いただきました山口県立大学大学院の院生ならびに教員の皆様に、深く感謝申し上げます。なお、この研究は、令和2年度山口県立大学研究創作活動助成（Ⅲ大学院教育開発型、課題名：デジタル革命による社会変化を見据えた未来の大学院に向けた基盤づくり—ID（Instructional Design）に基づくブレンド型eラーニング大学院教育の枠組みの検討）により研究が遂行されたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

調査票の内容

実際にはWEB調査として実施した内容を以下に示す。

<院生対象>

1. あなたの所属している研究科はどこですか。
①国際文化学研究科 ②健康福祉学研究科
2. あなたの年齢はどれですか。
①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代以降
3. 片道通学時間はどれにあたりますか。
①30分以内 ②1時間以内 ③1時間30分以内 ④2時間以内 ⑤その他
4. 遠隔授業はどこで受講されましたか。(複数回答可)
①自宅 ②職場 ③教室(研究室) ④院生室 ⑤その他
5. 過去に遠隔授業を受講したことがありましたか。
①はい ②いいえ
6. 今年度前期に受講した授業科目では、どのようなアプリケーションを利用しましたか。(複数回答可)
①Zoom ②YPUポータル ③WEBかるちゃー ④その他
7. 全体的に講義・演習の実施状況についてはいかがでしたか
 - 7-1. 出席のしやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-2. 教材(テキスト、講義資料など)の受け取りやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-3. 教材(テキスト、講義資料など)の見やすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-4. 説明の聞きやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-5. ディスカッションのしやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-6. レポートなどの提出のしやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-7. プレゼンテーションのしやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-8. 小テスト・試験の受けやすさ
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-9. 学習量
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-10. 授業内容の充実度
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 7-11. 教員とのやりとり
①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

7-12. 受講生同士のやりとり

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

7-13. 成績評価

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8. 研究発表会や研究会などはいかがでしたか。

8-1. 発表資料の準備のしやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-2. 発表資料の受け取りやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-3. 発表資料の提示のしやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-4. 発表資料の見やすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-5. 説明のしやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-6. 発表者の説明の聞き取りやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-7. 発表内容の充実度

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

8-8. 質疑応答のしやすさ

- ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

9-1. 問7～8で「とても満足」「やや満足」と回答した理由をご記入ください。

9-2. 問7～8で「やや不満」「とても不満」と回答した理由をご記入ください。

10. 学習動機や学習効果、研究の進め方など学習全般で良い点や逆に改善すべき点などがありましたらご記入ください。

11-1. 大学院で複数の科目を受講している場合、科目間で授業にばらつきがあると感じられましたか。

- ①はい ② いいえ ③ 科目を受講していない

11-2. 「はい」の場合は、改善が求められることなどをご記入ください。

12-1. パソコンやインターネットなどの環境や知識などで問題はありましたか。

- ①はい ② いいえ

12-2. 「はい」の場合、改善してほしいことなどがあればご記入ください。

13-1. 肩こり、腰痛、目の疲れ、体調不良、集中力がない、注意散漫など体調に変化がありましたか。

- ①はい ② いいえ

13-2. 「はい」の場合、改善してほしいことなどがあればご記入ください。

14-1. 今後も遠隔授業を続けたいですか。

- ①はい ② いいえ

14-2. 「はい」の場合、その理由をお聞かせください（複数回答可）

14-3. 「いいえ」の場合、その理由をお聞かせください（複数回答可）

15. 遠隔授業の実施について、他の大学院などで実施していることなどで参考になることがあれば教えてください。

<教員対象>

1. あなたの所属している研究科はどこですか。
 - ①国際文化学研究科 ②健康福祉学研究科

2. あなたの年齢はどれですか。
 - ①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代以降

3. 2019年度までに本大学院も含め遠隔授業を実施したことがありますか。
 - ①はい ②いいえ

4. 今年度前期に担当された授業科目では、どのようなアプリケーションを利用しましたか。（複数回答可）
 - ①Zoom ②YPUポータル ③WEBかるチャー ④Google Classroom
 - ⑤Microsoft Teams ⑥授業を担当していない

5. 対面形式と比較して、全体的に講義・演習の実施状況についてはいかがでしたか。前期に講義・演習を担当していない場合は、「該当なし」を選択してください。
 - 5-1. 受講生の出席状況
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-2. 教材（テキスト、講義資料など）の準備のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-3. 教材（テキスト、講義資料など）の提示のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-4. 説明のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-5. ディスカッションのしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-6. レポートなどの提出のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-7. プレゼンテーションのしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-8. 小テスト・試験のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-9. 受講生の学習量
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-10. 授業内容の充実度
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-11. 受講生とのやりとり
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-12. 受講生とのやりとり
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-13. 共に担当する教員とのやりとり
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし
 - 5-14. 成績評価のしやすさ
 - ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

6. 対面形式と比較して、研究発表会や研究会などはいかがでしたか。

6-1. 発表資料の受け取りやすさ

①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

6-2. 発表資料の見やすさ

①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

6-3. 発表者の説明の聞き取りやすさ

①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

6-4. 発表内容の充実度

①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

6-5. 質疑応答のしやすさ

①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満 ⑤該当なし

7-1. 問5～6で「とても満足」「やや満足」と回答した理由をご記入ください。

7-2. 問5～6で「やや不満」「とても不満」と回答した理由をご記入ください。

8. 対面形式と比較して、学習動機や学習効果、研究の進め方など学習全般で良い点や逆に改善すべき点などがありましたらご記入ください。

9-1. 大学院で複数の科目を受講している場合、科目間で授業にばらつきがあると感じられましたか。

①はい ② いいえ ③ 科目を担当していない

9-2. 「はい」の場合は、改善が求められることなどをご記入ください。

10-1. パソコンやインターネットなどの環境や知識などで問題はありましたか。

①はい ② いいえ

10-2. 「はい」の場合、改善してほしいことなどがあればご記入ください。

11-1. 肩こり、腰痛、目の疲れ、体調不良、集中力がない、注意散漫など体調に変化がありましたか。

①はい ② いいえ

11-2. 「はい」の場合、改善してほしいことなどがあればご記入ください。

12-1. 今後も遠隔授業を続けたいですか。

①はい ② いいえ

12-2. 「はい」の場合、その理由をお聞かせください

12-3. 「いいえ」の場合、その理由をお聞かせください

13. 遠隔授業の実施について、他の大学院などで実施していることなどで参考になることがあれば教えてください。

Distribution of Korean Books in Modern Times -Focusing on the Relationship with Japan-

Due to the economic level of Korean society and the low literacy rate, the number of Korean books issued was originally small, and a chronic shortage was a problem even in Korea. Therefore, after the opening of the country, it was difficult for people in the West and Japan to obtain it. However, due to the opening of the country and the collapse of the Joseon dynasty, the number of people who gave up old books increased, and such old books were leaked overseas.